

---

(令和5年10月25日掲載)

## 共に暮らし育む共感の日々



---

### 星野 ルネ (ほしの・るね)

タレント・漫画家。1984年アフリカ中部のカメルーン共和国生まれ。4歳目前で母の結婚に伴い来日し、兵庫県姫路市で育つ。高校卒業後、兵庫県内で就職したが、自分の生い立ちが人々の関心や共感を集めることを発見し、25歳で上京。タレント活動の傍ら、ツイッター上で発表していた自分の日常のエッセー漫画が話題となり、2018年に『まんがアフリカ少年が日本で育った結果』（毎日新聞出版）を出版。現在は放送作家を中心に、メディア方面でも個性を生かし活躍中。異文化理解・多文化共生などをテーマにした執筆、講演も多数。

---

物心がついた頃、私は日本の保育園に通い、多くの日本の園児に囲まれていました。しかし、私は1人だけ肌の色が異なり、アフリカ系の背景を持っていました。

私はアフリカ中西部のカメルーンという国で生まれました。

当時、日本の研究者たちがマンドリルの研究のために私の生まれた村の周辺の熱帯雨林を調査していました。私の母は日本人の研究者たちの補助スタッフとして彼らと行動を共にし、後に私の養父となる星野と出会いました。

これが私が星野ルネとして新たな生活を始めたきっかけでした。

2人の結婚後、私は日本へ移住しました。その時点で私は4歳になる目前。日本語を話すことができないアフリカの少年でした。

両親は私を受け入れてくれる幼稚園があるか心配していましたが、姫路市内のある保育園が私を受け入れてくれることとなりました。

私は外国人であり、日本語での意思疎通が難しい立場でした。母もフランス語とカメルーンの現地の部族語しか話せませんでした。保育園のスタッフは初めは受け入れをちゅうちょしていましたが、前例のない挑戦に取り組み、私を受け入れてくれました。

日本への移住と地域社会への適応は大きなチャレンジでしたが、外国人の母子を受け入れるという保育園の前例のない決断は、私たちにとって希望の光でした。

以降、姫路市内で育ちました。

外国人と言えば、一時滞在者や観光客、留学生、出稼ぎの労働者などを想像するかもしれませんが、実際のところ、外国人は多種多様で、私たち母子はその多様性の一部でしかありません。外国人の中には日本社会で暮らし、子供を育て、働き、税金を納め、

---

地域の友人となり、お祭りに参加するなど社会の一員となっている人たちがいます。

現代の日本には、種々さまざまな外国人が暮らしています。私は見た目だけでは完全にアフリカ系の外国人にしか見えませんが、幼少期から日本で育ち、日本語で会話をし、日本食を食べ、日本文化に浴して生きてきました。精神的には同世代の日本人の方が、カメルーンと同世代の人たちよりも通じ合えることが多いと感じます。

私の母は、人生で暮らした期間が、カメルーンよりも日本の方が長くなりました。日本にすっかりなじんだ部分があれば、生まれ育ったカメルーンの文化が色濃く残っている部分もあります。

マルチカルチャーで生きている母は、アフリカ出身の友人と出かけたり、姫路市内の行きつけの居酒屋で地域住民と酒宴を楽しんだりすることもあります。そんな私たち家族を受け入れてくれる方々が多くいる一方で、外見の違いから敬遠される方もいるように感じます。

日本で暮らす人々の層は多様です。一般的な日本人だけでなく、海外ルーツを持つ日本人、観光客などなど、外国人は単なる一時滞在者のみならず、日本社会の一部として受け入れられるべき人々も多く暮らしています。

異なるバックグラウンドを受け入れ、人々がお互いを理解し合う文化を育てることは、より温かく、共感に満ちた社会を構築する最初のステップになるのではないのでしょうか。